早稲田学園　四季回懐古

吉田絃二郎

わめは遠し茶つのしの早稲田
若草けむる江戸川のほとり
水車の音ものどのなる
流れをたどり若人ら
詩や誦みけん うちつれて
はるけき理想や 語りけん
その先人の跡いづこ

草笛吹けば 春もいぬ

おもかげ橋の名もゆふし
みどりのかげにやすらいて
友と文びし 幾年を
忘れはせじを別るとも
建学のほこり うけつぎて
久遠の眞理説く子らに
森のかげやき この夕り来て
自由の鐘のひびきける

森のかげやきこのをり来て
自由の鐘のひゞきけるゐ

雲白く戸山ヶ原に飛びてあり
丘の小径の落莫と
行人の影とてもなき
草むらに一人書読む
若人の姿寂しく
霧立ちこめて新月の
影ほのかなる夕まぐれ
牛の風のみぞ秋を知る
七つの丘にひゞく鐘の音

目白の丘の薬師と
雪に草谷たそがれの
駒塚橋にたゝずめば
大講堂の鐘の音の
はるけき空にひゞきつゝ
遊子故郷をしのぶらん
高きいらかに星冴ゆく
早稲田の木林は静あり